

洋楽の移入、定着に関する一考察 — 地方百貨店の取り組み —

赤井 裕美^a

^a 湘北短期大学保育学科

【抄録】

蝦夷地と言われ、洋楽文化の面でも遅れをとっていた北海道が、今や全国的に見ても高い水準が認められる地となったのには様々な要因が考えられる。洋楽文化の推進と定着には、讚美歌を歌うキリスト教の普及、学校での音楽教育の他にも、庶民の中で育った「音楽隊」の存在を忘れることはできない。明治時代から従業員編成による音楽隊の活動を行っていた地方百貨店である「丸井今井」に焦点を当て、その取り組みについて考察する。

【キーワード】

北海道洋楽受容、音楽隊、百貨店、丸井今井

はじめに

まずは北海道の文化的土壌について、蝦夷地から改称された1869年（明治2年）頃からの概説と、洋楽受容について辿る。なかでも、後に本店と6つの支店を構える北海道最大規模の百貨店となった「丸井今井」が明治時代に取り組んでいた音楽隊の活動について、その文化活動が道内の洋楽普及に影響を及ぼしたと考える根拠を示す。

1. 北海道開拓の歴史

「蝦夷地」と呼ばれていた日本最北端の地は、箱館戦争終結後の1869年（明治2年）、幕末の探検家である松浦武四郎によって名付けられた北加伊と律令制の五畿七道から、明治新政府によって「北海道」と改称される。同年、政府は「開拓使」を

設置し、諸藩へ分領して支配させ、全国各地からの移民による開拓を進める。入植者は東北地方の青森県や北陸地方の新潟県出身者が多く、この2県だけで5万戸以上いたという。

政府は1873年（明治6年）に屯田兵制を敷く。北方警備、資源開発などを目的とし、平時には農業を営みながら軍事訓練を行い、有事には軍隊の組織として戦うために設けられた屯田兵の多くは、元士族であった。琴似屯田をはじめとし、道内37ヶ所に屯田兵とその家族が入植したが、後に平民からも募集をし、内陸部の開拓を進める。屯田兵制度は1904年（明治37年）まで続いた。

1882年（明治15年）には開拓使が廃止され、その後、函館県、札幌県、根室県が置かれたが、やがてそれら三県も廃止され、1886年（明治19年）に北海道庁が置かれた。北海道は札幌を中心として、開拓技術者の養成や西洋式農業の導入により、

農業、加工業、建築業、製鉄業などが発展し、近代化されていく。

このように、北海道は全国からの入植者によって成り立った土地であるため、開墾・開拓に追われ、明治初期には文化的な土壌はほぼなかったと言える¹⁾。

2. 洋楽の受容と普及

(1) キリスト教とお雇い外国人

日本における西洋音楽は、1549年（天文18年）にスペイン人宣教師のF.ザビエルが鹿児島でキリスト教を伝えた際に讃美歌を広めたのがきっかけとされている。長い鎖国の後、1854年（嘉永7年）にM.ペリー率いるアメリカ合衆国東インド艦隊が、浦賀や久里浜に続いて箱館に上陸する。松前藩は異船や異人を見ることを禁じていたため、軍楽隊の演奏を耳にしたのは出迎えの要人とごく少数の住民のみであった。そこでは《ヤンキー・ドゥードルⁱⁱ⁾》などが演奏されたというが、1859年（安政6年）、箱館にイギリス領事官が開設された際には、イギリス軍楽隊により《アニー・ローリー》他3曲が演奏されたとの記録がある。その後、1869年（明治2年）に箱館から改称された函館には、イギリスやフランス、アメリカの軍楽隊が函館公園などで演奏を行っており、多くの住民が西洋音楽を耳にしている。

また、1868年（慶応4年）に初代ロシア領事が箱館ロシア領事館に隣接して建てた聖堂を基とした「ハリストス正教会」や、同じ頃に仮聖堂を建てた「カトリック元町教会」などでは讃美歌が歌われており、1872年（明治5年）頃には日本語に訳された讃美歌も歌われるようになる。

一方、近代化を進めるために1868年（明治元年）頃から政府により招聘された「お雇い外国人」と呼ばれる技術者や教育者が日本に入ってきたが、

北海道では開拓使を通して78名を受け入れている。箱館戦争で新政府軍の参謀であった黒田清隆は、開拓長官として1872年（明治5年）まで北海道開拓の指揮を執っていた。黒田により招聘されたH.ケプロンが北海道開拓最高顧問となり、農業、工業、医学といった分野にアメリカから優秀な人材を呼び寄せ、開拓事業を進めていく。

1876年（明治9年）に札幌へ赴任したエドウィン・ダンは、乳牛の飼育管理や品種改良の方法を指導し、バターやソーセージなどの加工品製造機を導入させるなど、北海道の酪農の礎を作った。ちなみに、ダンは再来日後には新潟に住み、当時の日本では数少なく大変高価であったピアノと蓄音機を購入し、レコードを楽しんでいたという。次男のジェームス・ダン（1898-1950）は、東京音楽学校（現在の東京藝術大学音楽学部）、同研究科を経てドイツへ留学し、帰国後は演奏活動の傍ら、東洋音楽学校（現在の東京音楽大学）などで教鞭をとっているが、彼の言では、父エドウィンも音楽に関する造詣が深かったというⁱⁱⁱ⁾。

また、1876年（明治9年）に札幌農学校の教頭として招聘されたW.クラークは、専門の植物学や動物学の講義だけではなくキリスト教伝道も熱心に行っていたため、農学校の一期生はほぼ全員がキリスト教に入信し、讃美歌を歌っていたという。8カ月で帰国したクラークの後を継いだ二代目教頭W.ホイラーに影響を受けた内村鑑三や新渡戸稲造らは、後に「札幌バンド」と呼ばれるプロテスタント系キリスト教（メソジスト派）のグループを作り、活動する。

宣教師S.C.スミスは、1886年（明治19年）に北海道尋常師範学校（後の北海道教育大学の母体）が開設された際に英語教師として招聘されたが、夜間には婦人達へ英語や料理を熱心に教えていたことが認められ、翌年に現在の北星学園女子中等高等学校（プロテスタント系）の前身である「ス

ミス女学校」の開設を許可される。

その他にもアイヌの教育に尽力した宣教師J.バチェラーなどが道内各地にキリスト教を布教したことで、邦楽とは異なる響きを持つ讃美歌が北海道民の耳に馴染んでいった。

(2) 音楽隊

日本における洋楽浸透には、音楽隊の影響も大きい。まずは軍楽隊に関して触れる。

1869年（明治2年）、薩摩藩の軍楽伝習生30名がイギリス公使館配属の軍楽隊長J.フェントンに教えを受け、日本人初の軍楽隊を結成する^{iv}。その後、英・仏・伊などの軍楽隊から指導を受けるようになり、1879年（明治12年）にドイツから来日したF.エッケルトの指導により演奏技術を上げる。また、洋楽を学ぶためにはピアノの習得が不可欠と考えたエッケルトの進言により、海軍軍楽隊は1880年（明治13年）にドイツからピアノ教師のA.レーヤを招聘する。10年間にわたるレーヤの指導によって、後にプロの演奏家となった人もいう^v。こうした経緯もあり、日本の洋楽教育は長い間ドイツ系音楽主体で進められていく。

その頃北海道では、開拓使主導で炭鉱の石炭搬出のための鉄道が開通する。1881年（明治14年）に小樽市の手宮と札幌間で、翌年には三笠市の幌内まで開通している。1883年（明治16年）に札幌の豊平館^{vi}で祝賀会や舞踏会が催された際には、「鹿鳴館」で演奏を担っていた東京の陸軍軍楽隊が来道し、ポルカ《鉄道音（てつどうのおと）》等を演奏したという記録がある。当時の軍楽隊の楽器編成はトランペット、クラリネットなどの管楽器や打楽器で、札幌の人々はここで本格的な吹奏楽の演奏を耳にしている。

明治20年代になると、一般市民の中からも音楽隊が生まれ、活躍する。音楽隊はキリスト教徒による編成が多く、1893年（明治26年）に編成され

た札幌農学校の音楽隊の他に、北海禁酒会の少年鼓隊、基督教徒青年会の音楽隊など、各地でいくつもの少年音楽隊が存在していたという。当時の使用楽器はアコーディオンやヴァイオリン、打楽器などであったが、街では音楽隊の演奏が毎日のように聞かれるようになる^{vii}。また、日清戦争から日露戦争にかけて商工業の発展がめざましかった札幌では、自店の催事や宣伝のために楽隊を編成する商店が増えていく。なかでも、看板業や活動写真業に関係していた東京出身の原田文治郎が1901年（明治34年）頃に編成した「赤帽子音楽隊」は、人気が高かった。映画館の宣伝のために演奏しながら街を練り歩く、いわゆる「ジンタ」をしていた森佐久間が後に原田から新聞販売業とともに引き継ぎ、1908年（明治41年）には「札幌音楽隊」と改称し、活動する。札幌音楽隊は1918年（大正7年）、開道50周年を記念した「北海道博覧会」が開催された際、中島公園内に設けられた円形演奏堂で50日間演奏を続け、訪れた140万人以上の観客を魅了したという記録がある。選抜された13人のメンバーは、モーツァルトやスッペの序曲、また邦楽の編曲など多数の曲を演奏したという^{viii}。後に札幌音楽隊は、指揮者兼楽長の斎藤嘉一郎らを中心としたメンバーで独立し、昭和初期まで活躍を続け、東京に出てプロの演奏家となった人もいる。

明治から大正にかけ、大衆娯楽としてサイレント映画が盛んになっていた頃、宣伝のために市中を歩いて客寄せの演奏をし、上映中には画面の情景に合わせて演奏を行う「ジンタ」などの楽士は花形の職業であった。技術が上達していったことで、シューベルトの《未完成交響曲》といった本格的な曲も演奏するようになり、運動会、出征軍人の歓迎時などにも呼ばれるようになる。他にも製麻会社やビール会社、雑貨店によって編成された音楽隊が、自店や官庁の行事などで頻繁に演奏

を行っている。

特に札幌市民は、明治時代から軍楽隊による演奏を耳にする機会が多かった。童謡《どんぐりころころ》や《とんび》などで知られる札幌出身の作曲家である梁田貞も、1898年（明治31年）頃の札幌祭りで聞いた軍楽隊の演奏に魅了されて音楽の道を志した、と述懐している^{ix}。昭和に入ると、1928年（昭和3年）の道内ラジオ放送開局記念のために東京から陸軍戸山学校軍楽隊^xが来道したが、札幌駅から中島公園の野外音楽堂へ演奏しながら行進する姿は圧巻であったという。その後も戸山学校軍楽隊は、1936年（昭和11年）に陸軍大演習で来道した際には道央、道東をめぐって小・中学校で講習会を開き、その演奏に影響を受けた児童や学生によって、道内では吹奏楽が盛んになっていく。

このように、キリスト教の讃美歌や、身近な存在となっていた音楽隊による演奏などを道民が耳にする機会が増え、道内にも洋楽が浸透していく。

(3) 音楽環境

①音楽教育

日本における音楽教育は、1872年（明治5年）の学制頒布を契機として、一般国民に音楽を教えるという国家による動きが本格化する。1879年（明治12年）、文部省によって東京上野に音楽教育の調査・研究を目的とした「音楽取調掛」が設置され、西洋音楽を本格的に取り入れる動きが強まる。その際、欧化主義者は洋楽のみの推進を唱えたが、国粹論者は、「音楽は国民性を土壌とした上で国独自のものを育むべき」と主張した^{xi}。そこで担当官の伊沢修二は、アメリカから招聘したL.メーソンのアドバイスのもと、折衷派の意見を採用する。1881年（明治14年）に両者が中心となって刊行した『小学唱歌集』には、現在も愛唱されている《むすんでひらいて》の原曲であるルソー作曲

の《見わたせば》や、ドイツ民謡の《蝶々》、スコットランド民謡の《蛍》（現在の曲名は《蛍の光》）など、西洋のメロディーに日本の歌詞をつけた曲が多く載せられており、その後も次々と発表された「唱歌」によって日本に新しい音楽文化が根付いていく。1887年（明治20年）、音楽取調掛は伊沢の尽力により東京音楽学校に改組され、全国の師範学校では音楽教員の養成も始まった。

北海道でも、道庁が急務として東京音楽学校や師範学校で学んだ卒業生を全道各地の小学校に教師として派遣する。東京音楽学校出身で1886年（明治19年）開校の北海道師範学校（現在の北海道教育大学）初の音楽教員として配属された成川熊雄や、函館や札幌で指導していた玉川瓶也は、唱歌や軍歌の歌唱法を中心に講習会を開き、教員養成や音楽教育の普及に努めた。その玉川の指導を受けた工藤富次郎は、後に函館高等女学校（現在の函館西高等学校）の音楽担当教諭として着任し、地元の教師に対してオルガン指導や歌唱指導をしている。工藤は「アポロ音楽会」を結成して演奏会を頻繁に開催するなど、自らの活動を通して音楽家を志す若者へ影響を与えたが、工藤が樺太転勤で函館を離れるとともに会も消滅したことで、その後は行政の中心となっていた札幌が道内の音楽界を牽引していく。

②大正、昭和初期の演奏会場と楽器の普及

大正に入り、当時の札幌区教育会では道外から一流演奏家を招聘しようとする動きが起こる。1914年（大正3年）には、東京で社会音楽の改善を呼びかけていた小松耕輔、東儀哲三郎らによる会を映画館のエンゼル館と豊平館で会を開いている。この頃は洋楽と邦楽が入り混じった会が多かったが、その後も一流演奏家による会は札幌、函館を中心に開かれ、徐々に聴衆も集まるようになる。

1923年（大正12年）の関東大震災がきっかけとなり、様々な分野で活躍する人々が活動の場を北海道に移したことは、道内における文化の発展を促す一因となった。帝国ホテルなどを竣工した建築家の田上義也（1899-1991）は、J.バチェラーとの出会いにより建築とともに音楽活動も行うようになり、道内を中心に活躍する。札幌市民交響楽団（現在の札幌交響楽団）の初代常任指揮者となったヴァイオリニストの荒谷正雄（1914-1996）をはじめ、道内で田上の演奏に影響を受けた人は少なくないという。

海外の一流演奏家による会も増えていくが、それらは元海軍軍楽長のチェロ奏者で指揮もつとめる傍らアカシヤ楽器店を経営していた石井春省の優れたプロモート力によるものが多かった。1931年（昭和6年）、世界的ヴァイオリニストのY.ハイフェッツによる演奏会が映画館の松竹座で開かれているが、当時の道内では、クラシック音楽の中でもいわゆる「芸術音楽」よりも大衆受けする音楽の方が好まれており^{xii}、さらに当時の音楽会場は、客席数の多さと施設使用料の面から映画館が使用されることが多かった。ホールを持つ高級ホテルであった豊平館は使用料も高いことから頻繁には使用されず、小規模な演奏会は時計台内のホールなどが使われていたが、1927年（昭和2年）に豊平館の北側に公会堂ができてからは、大規模な会は公会堂で行われるようになる。しかし、海外の一流演奏家の出演料は高額であったため、収支の面から映画館が使われることが多かった。ちなみに、後年の1956年（昭和31年）に札幌で行われたピアニストのS.フランソワの演奏会や、同年のロサンゼルス・フィルによる演奏会などは、四千名収容可能な中島スポーツセンターで行われたが、実際は会場外の音が筒抜けといったクラシック音楽には不向きな会場であった^{xiii}。また数々の華麗な演奏に対しても、ヴァイオリニスト

のジンバリストをして「『アンコール』と怒鳴るこの土地の、奇怪な風習」と驚愕させ、曲が盛り上がる速いパッセージ部分では拍手喝采であったという記録^{xiv}からは、昭和初期における道民の洋楽への理解の程度について容易に想像がつく。

徐々に道民による演奏会も増えていき、札幌の公会堂で1930年（昭和5年）から1944年（昭和19年）まで紀元節の夜に行われていた市主催の「建国祭音楽会」では、毎年各地から邦楽・洋楽団体が集った。また、北海道大学では二つのオーケストラが活動していた他、多くの楽団や合唱団も演奏会を開くようになるが、日中戦争の頃になると国粋色が強まる。ピアニストの鈴木清太郎らは札幌音楽協会の講習会を開いているが、「愛国行進曲」や「凱旋」など、時局に即した歌の合唱練習等の会場には「富貴堂ホール」を使用している。

「富貴堂」は札幌に明治から平成までの間存在した書店で、専門楽器店がほとんどなかった時代に洋楽器を販売するなど、学生から文化人まで多くの常連がいた。店主の中村信以は、京都から来道して店を構え、1898年（明治31年）から札幌中心地で貸本業、販売業の経営を始める。1900年（明治33年）からは文房具や月刊雑誌を扱うと同時に、ヴァイオリンなどの洋楽器の陳列を始める。1905年（明治38年）、他店から店舗、住宅、商品全てを譲り受け、国定教科書の販売権も継承したことで、店舗を拡張する。1908年（明治41年）には一階部分をコンクリート建てにし、道内では画期的であった土足入場をいち早く取り入れる。この頃、奥の陳列室には当時18円の子葉オルガン、2円50銭の鈴木バイオリン、3円50銭のマンドリンが並べられていたという。また、富貴堂が創業20周年を迎えた1918年（大正7年）には、開道50周年記念博覧会と札幌開府50周年記念式典の開催を記念して社屋の隣接地に楽器部を増設し、ピアノやギター、またレコードや楽譜などの販売も始める。

1923年（大正12年）頃には二階を蓄音機とレコード売り場として拡張し、2年後にはドイツ製ピアノを委託契約して陳列販売を始める。札幌には他にも前述した石井春省が経営するアカシヤ楽器店などがあったが、富貴堂楽器部は特に高級楽器であったピアノを道内で数多く販売している。また、1937年（昭和12年）に竣工した新店舗は、道内では百貨店の「丸井今井」、同じく百貨店の「五番館」に次ぐ広い売り場面積をもつ店舗となる。後にホールの増設やオルガン、ピアノを初歩から指導する「音楽教室」を開設し、札幌の幼児や児童の音楽教育にも貢献する。2003年（平成15年）、多くの市民に惜しまれながら閉店した富貴堂は、楽譜だけではなく、ピアノやヴァイオリンといった楽器や音楽教育を広め、北海道の文化向上に貢献した書店であった。

③ラジオとレコード

1928年（昭和3年）、道内では中島公園の札幌放送局から一日5時間程度のラジオ放送が始まったが、開局当時は東京からの中継ができず、札幌で生放送番組を制作していた。ラジオ体操、子ども向け番組、料理番組や講談の他、浪花節や追分節、長唄や琵琶といった邦楽が多く放送されていたものの、一部にはワグナーの歌劇《タンホイザー》といった洋楽を演奏した記録もある。そこでは道内で活躍していた演奏家と、前述のアカシヤ楽器店を経営する石井春省率いる海軍軍楽隊出身者によって編成された「中島オーケストラ」や後述する「丸井ジャズ・バンド」の演奏、学生によるハーモニカやマンドリンの演奏などが全道に流れていた。しかし、東京との回線が通ってからは道内の演奏団体の出演回数は大幅に減ったという^{xv}。

レコードに関しては、明治30年代には道内でも各地に大道蓄音機屋が現れたが、その後、小樽、札幌、函館などに蓄音機専門の店が開かれ、個人

で蓄音機を購入する人も出てくる。大正に入ると、当時は北海道帝国大学（現在の北海道大学）の学生であり、実業家の父を持つ植村泰二（1896-1971）が、時計台の二階で2、3ヶ月に一度、レコードを聞く機会を設けていた。植村の学内の友人であった伊福部昭（1914-2006）は作曲仲間の早坂文雄（1914-1955）らとともに、一流音楽家の演奏を聴いて研究ができるという恩恵を受けていた。植村は後に東京に移り、トーキー開発の会社を運営するなど様々な文化に貢献した人物であるが、若い頃には在学時に積極的に関わっていた「合唱」のジャンルを大正期の札幌に広め、音楽家を志す人達には広い人脈を生かして援助するなど、道内の音楽界にも重要な存在であった。

昭和に入ると、国内で生産、販売されるようになったSPレコードを聞くことができる「名曲喫茶」が札幌にもいくつか誕生する。なかでも有名だったのが、1928年（昭和3年）の開店当初からクラシックのレコードを豊富に取り入れていた「ネヴォ」という店で、北大の学生や進歩的な考えを持つ文化人で常に賑わっていたという。伊福部などは現代音楽を聴くために頻繁に出入りする常連であったという^{xvi}。また、その頃にはレコード店や楽器店が主催するレコード・コンサートが定期的に行われている。邦楽やジャズ、クラシックが混在した会が多かったが、クラシックのみで行われる会もあったという。上記の伊福部のように、I.ストラヴィンスキーやM.ラヴェルといった当時の現代音楽を含め、一流の演奏を生演奏よりも先にレコードで耳にする人々が増えていく。LPレコードが流通し始めた1953年（昭和28年）頃でもレコード・コンサートは盛況で、札幌市民会館（旧公会堂）で行われた際も千六百席がほぼ満席の状態であったという。その後、ステレオが発売され、家庭にオーディオが普及するようになると、レコード・コンサートはその役割を終えることとなった。

伊福部は、札幌第二中学校（現在の札幌西高等学校）時代からの同級生である三浦淳史(1913-1997)や作曲仲間の早坂とともに、1932年（昭和7年）に「新音楽連盟」を結成する。三浦は1922年（大正11年）に洋書専門店として誕生した札幌の丸善を通し、海外の出版社から直接、最新の楽譜を取り寄せていたという。当時の日本では洋楽の主流がドイツ古典派・ロマン派音楽であったが、北海道の伊福部らはフランスの現代音楽にいち早く興味を持ち、1934年（昭和9年）の「国際現代音楽祭 室内楽」と銘打った自主公演では、当時急進的なフランス人作曲家と言われていたE.サティによる《3つのグノシェンヌ》などのピアノ曲の他、演奏曲14曲中8曲もの日本初演を、伊福部のヴァイオリン、早坂のピアノで行っている。伊福部はこれらの自主公演について「生の演奏を見られるなんていうことは非常に少ないですから。どの音楽会でも必ず満員でした^{xvii}」と回想している。「新音楽連盟」は、伊福部が交響楽作品でチェレプニン賞を、早坂が交響曲で

ワインガルトナー賞を受賞した後の1938年（昭和13年）頃までで活動は休止するが、三浦も後に音楽評論家として活躍することとなる。開拓者精神に満ちた北海道という土地柄と、文化的に台頭してきた札幌ならではの自由闊達な活動により、昭和初期の道内に洋楽の新風がもたらされていった。

3. 丸井今井百貨店の音楽活動

(1) 北海道の百貨店

前述のラジオ放送に出演していた「丸井ジャズ・バンド」の母体は、明治時代から道民に親しまれていた「丸井今井」であるが、まずは道内の百貨店事情を知るために、昭和半ばまでに百貨店展開した「丸井今井」以外の主な店舗について調べた。関東大手百貨店支店の三越札幌店を除き、創業は明治・大正時代である（表1）。

他にも、小規模な百貨店形式の店舗や百貨店展開が遅かった店舗の創業と廃業、また後に西武、松

店名	市	期間	備考
五番館	札幌	1906年（明治39年）～1990年（平成2年）	前身の札幌興農園は1894年（明治27年）開業の種苗・農機具販売業。一時期は三越の年商を上回るなど、道内では丸井今井、三越と激しい競争の時代があった。西武百貨店と業務提携する前の1988年（昭和63年）に、企業としては消滅している。
まるいいとう	北見	1929年（昭和4年）*～1986年（昭和61年） *1956年と捉えることもある。	1914年（大正3年）、伊藤元治が呉服店丸井今井から独立し、北見市（当時は野付牛村）にいとう金物店として創業。1929年（昭和4年）には北見支店を増築し、百貨店部となり、1956年（昭和31年）に百貨店営業の許可が下りる。
丸三鶴屋	釧路	1930年（昭和5年）～1996年（平成8年）	1906年（明治39年）、両角栄治が呉服店丸井今井から独立し、丸三越後屋呉服店を創業。1930年（昭和5年）に四階建ての百貨店として開店。同じ頃、北見店も開店。1996年（平成8年）に廃業するが、丸井今井が株式の大半を取得し、釧路店として建物もそのまま使用していた。

店名	市	期間	備考
藤丸百貨店	帯広	1930年(昭和5年)～現在	富山出身の藤本長蔵が地元の呉服店で資金を集め、目をつけていた帯広に反物を売る店を構えた後、1900年(明治33年)に北越呉服を創業。十勝地方の地域密着型百貨店として、現在まで成功を収めている。
三越札幌支店	札幌	1932年(昭和7年)～現在	日本橋に本店を持つ三越百貨店の支店として札幌では五番館、丸井今井札幌本店に次いで開店。特に立地が近かった丸井今井と競合した。2011年には丸井今井と合併し、株式会社札幌丸井三越となる。
大黒屋	小樽	1934年(昭和9年)～1993年(平成5年)	富山の大黒屋が1918年(大正7年)に小樽で呉服店を創業し、百貨店として展開。同じ「稲穂第一大通り」に参入してきた丸井今井小樽店、ニューギンザ百貨店と競合する。
棒二森屋	函館	1936年(昭和11年)～2019年(平成31年)	1925年(大正14年)に開業した金森森屋百貨店と1931年(昭和6年)に百貨店展開を始めた棒二荻野呉服店が合併し、開業。函館駅前の立地であったため、丸井今井函館店と競合する。
丸勝松村	旭川	1938年(昭和13年)～2003年(平成15年)	1918年(大正7年)、呉服店として創業。丸井今井旭川店と競合する。1971年(昭和46年)にはマルカツデパートに改称した。
鶴丸百貨店	苫小牧	1952年(昭和27年)～2002年(平成14年)	1921年(大正10年)に中嶋呉服店として創業。1995年に同地域に進出してきた丸井今井苫小牧店と競合する。
ニューギンザ百貨店	小樽	1955年(昭和30年)～1988年(昭和63年)	1917年(大正6年)に河野呉服店として創業。大黒屋、丸井今井小樽店と競合し、地域を活性化させていた。閉店後の再開発跡地に丸井今井小樽店が拡張移転した。
丸丹おかむら	夕張	1957年(昭和32年)～1980年(昭和55年)	1918年(大正7年)に岡村呉服店として創業。石炭産業の最盛期には人口が多かった夕張で、空知地方唯一の百貨店として親しまれていた。

表1 昭和半ばまでに百貨店展開した道内の主な店舗

坂屋などの道外大手百貨店の支店進出が見られる。

日本における店舗の百貨店化は、1904年(明治37年)、日本橋に本店を置く三越呉服店が新聞各紙に「デパートメントストア宣言」を掲げたのを契機とし、明治の終わりにかけて、いとう呉服店(現・松坂屋)、高島屋、そごう、白木屋、松屋、大丸などが販売品目の多様化とともに陳列式営業を始める。そして、従来の土蔵造りの店舗から洋式造り

(2) 「丸井今井」の初期の沿革

「丸井今井」はまもなく創立150周年を迎える老舗百貨店であるが、百貨店業界衰退という時代の流れを受け、現在は初期陣営とは経営母体が異なる。ここでは初期の沿革をたどる。

の大規模な百貨店へと業態を転換させていく。

北海道では、札幌で種苗、農機具などの販売を行っていた「札幌興農園」が1906年（明治39年）に「五番館」として開店し、1910年（明治43年）に改築した際に「デパートメントストア」と称して輸入雑貨や日用品、穀類などを取り扱う道内初の百貨店形式での店舗となった。その頃、販売業種の展開を考えていた今井藤七（1850-1925）も、百貨店化の機をうかがっていた。

今井藤七は、1871年（明治4年）に新潟県三条町（現在の三条市）から来道する。後年の調査ではあるが、『札幌区区勢調査原表』（明治42年調査）による当時の札幌区民の出身県は新潟県が最も多く、富山、福井、石川と続く。また上位4県からの移住者の生業は商業、交通がいずれも35%を占めていたという^{xviii}。今井も後に新潟から多くの若者を来道させ、店員として雇っている。

翌1872年（明治5年）、今井は同郷の高井平吉と共同で現在の札幌の中心地に小間物店の「今井商店」を開業する。2年後の1874年（明治7年）には「今井呉服店」を開業し、1879年（明治12年）からは当時全国でも少なかった価格交渉のない正札販売を開始し、すべての客に対して同じ価格で販

売を行った。1891年（明治24年）には東京に仕入店を開設して直接仕入れへと切り替えることで、低価格での物資供給を可能にする。こうした営業姿勢が評判を呼び、後に尊敬と親しみを込め、屋号の「○（マル）井」から「まるいさん」という呼ばれ方が、まずは同業者から、そして広く道民に浸透する。1888年（明治21年）には「今井洋装店」を開業して洋服販売にも乗り出した他、1890年（明治23年）に滝川支店を開設したのを皮切りに、道内各地に呉服店の支店展開を始める。新潟から呼び寄せた弟の武七、良七と協力体制を築き、1891年（明治24年）には小樽支店、室蘭支店、翌1892年（明治25年）には函館支店、1897年（明治30年）には旭川支店と、道内に広く店舗を拡充する。

そして1916年（大正5年）、レンガ・石造り、総建坪1260坪、三階建ての近代的な店舗の新築とともに、今井呉服店と藤武良屋呉服店^{xix}、今井洋物店を合併し、札幌本店を百貨店として営業開始する。その後、1923年（大正12年）には函館支店と旭川支店、小樽支店の百貨店営業を展開し、昭和に入って室蘭支店も百貨店営業を開始したことで、支店の百貨店化を完了する（表2・図1）。

店舗	期間
札幌本店	1872年～現在（百貨店展開は1916年）
小樽店	1891年～2005年（百貨店展開は1923年）
室蘭店	1891年～2010年（百貨店展開は1936年）
函館店	1892年～現在（百貨店展開は1923年）
旭川店	1897年～2009年（百貨店展開は1923年）
苫小牧店	1995年～2005年
釧路店	1996年～2006年
滝川支店	1890年～1910年 *百貨店展開はせず
岩見沢支店	1904年～1909年 *百貨店展開はせず

表2 丸井今井百貨店として経営していた本店と支店



図1 道内に存在していた丸井今井百貨店の本店と支店

火災により札幌本店が全焼した後、1926年（大正15年）には一部五階の全四階建てで、道内初の客用エレベーターと催事場、大食堂、店内放送設備、屋上に遊園場を備えた店舗として復興する。大正末期から昭和にかけ、国民の生活レベルが向上してきた時代に、百貨店の陳列販売は客の購買欲を刺激し、「買い物」そのものが娯楽となっていく。

また、日本の百貨店は、屋上を庭園などの施設を設置することで娯楽性を兼ね備える場としていた。東京や大阪の百貨店では早い時期から屋上に遊園地や動物園、奏楽堂など、大人も子どもも楽しめる娯楽施設を取り入れている。1907年（明治40年）、三越日本橋本店で屋上に初めて庭園を構えたことに始まり、1931年（昭和6年）には松屋浅草店が七階と屋上に「スポーツランド」や「プレイランド」といった屋上遊園施設を構える。そこには、百貨店は家族連れで一日通して楽しめる場所にしたい、という当時の百貨店業界に共通した思いがあった。そのように隆盛を極めた屋上遊園施設ではあるが、後の昭和40年代の消防法で屋上の半分を避難区域として確保する義務が設けられたこと、また近年の少子化や娯楽の多様性も影

響し、現在では百貨店の大規模な屋上遊園地は姿を消してしまう。

一方、北海道最大の百貨店であった「丸井今井」本店では、1926年（大正15年）設置の屋上庭園・遊園場に猿、かわうそ、ペリカン、鶴などが飼われ、子どもが楽しめる遊具も備えられていた。二代目社長今井雄七の代では、正面玄関などに装飾電球を取り入れて夜間のショーウィンドーをイルミネーションで飾り、1927年（昭和2年）からは土・日曜は21時まで営業し、スタジオの他に屋上庭園でも常に追分、長唄、洋楽、琴、琵琶、童謡などを演奏させるなど、百貨店が文化的な娯楽場となるべく、日々創意工夫がなされていた。

1932年（昭和7年）、三越百貨店が北海道に参入したことによって3つの百貨店が競合することとなり、昭和初期の札幌では「見るは三越、遊ぶは丸井、買うは五番館」と言われるようになる^{xx}。関東などの大手百貨店は明治末の開業時から高級店として営業していたが、百貨店展開が遅かったことや文化事情が異なっていた北海道では、信用とサービスに徹した丸井今井をはじめとする百貨店は、当初から大衆に身近な存在であった。

(3) 戦前戦後の「丸井今井」の文化活動

①音楽隊とピアノ・トリオ、ジャズ・バンド

前述の通り、音楽隊は道内に洋楽が広く根付くために重要な役割を果たしたと言えるが、百貨店と音楽隊の関係については、先に関東や関西などに存在した百貨店にその例が見られる。

東京日本橋の三越本店では、1909年（明治42年）に音楽的素養の優れた15名による三越少年音楽隊を編成し、店内外の各種行事に出演させて百貨店の知名度と共に音楽隊自体の評判を上げていった。いとう呉服店（現在の松坂屋名古屋店）も1911年（明治44年）に少年音楽隊を編成し、三越少年音楽隊とも競演している。この音楽隊は後に東京に移転、合併して現在の東京フィルハーモニー管弦楽団の母体となった^{xxi}。他にも日本橋に存在した白木屋は1911年（明治44年）に少女音楽隊を、大阪三越では1912年（大正元年）に大阪三越少年音楽隊を、同年に京都大丸呉服店でも大丸少年音楽隊や、1923年（大正12年）には大阪高島屋少年音楽隊が結成されている^{xxii}。

上記のように、買い物客に喜んでもらうための余興として少年少女で編成された音楽隊を持つ百貨店はいくつか存在していたが、明治時代に従業員で編成された音楽隊をかかえていた百貨店は、浅草の松屋^{xxiii}と北海道の丸井今井のみであった。特に丸井今井では本店・支店それぞれの音楽隊が華やかな活動を展開していた。

丸井今井の音楽隊については、結成時の正確な記録は残っていない。1896年（明治29年）に15歳で丸井今井に入店した清水雄平元常務は「愉快的追憶を辿って先ず挙げるべきは、店員で組織した楽隊であった」と言い、先輩に誘われて入り、映画館で活躍していた楽士から習得した腕前を街頭商戦の宣伝時に発揮し、世間からその存在を認められるようになった、と続けている^{xxiv}。活動の幅は広く、陸軍祝賀会などでは軍歌を演奏し、行幸

された皇太子殿下（後の大正天皇）の前でも演奏したという。日露戦争から凱旋帰国した将兵歓迎式典では、前述の「赤帽子音楽隊」や製麻会社が組織した楽隊とともに、丸井今井の音楽隊が演奏しており、1901年（明治34年）に創業30周年記念で結成された、華やかな衣装をまとった7名による今井洋物店のバンドの演奏は札幌の名物となっていたという。

支店での活動に目を向けると、1890年（明治23年）に開設した今井呉服店初の地方支店の滝川支店で1900年（明治33年）に編成された音楽隊や、同時期に編成された小樽支店の音楽隊でも「売り出しのとき店のバルコニーの上で、金ボタン、モール付きの制服に身を固めて演奏するのが“売り物”になった^{xxv}」という。室蘭支店の音楽隊も、出征や凱旋の歓送迎時を含めて毎日のように活躍したという記録があり、当時の音楽隊の印はんてん姿の写真も残っている^{xxvi}。

隊員の応召や推進役の転勤により3、4年で自然消滅した滝川支店音楽隊の例もあるが、札幌本店の音楽隊は大正に入ってから活動が続けていたという。明治20年代後半から札幌、小樽、滝川、室蘭といった広範囲で音楽活動を行っていた丸井今井の文化活動は特筆すべきであろう。

首都圏では、三越本店がデパートメント宣言をした際、休憩室に飾っていたピアノとヴァイオリンを一般客が自由に弾くことができたといい、翌1906年（明治39年）には店内でピアノとヴァイオリン演奏を始めている。丸井今井でも、1922年（大正11年）に東京仕入店から札幌本店支配人に就任した今井智能吉が、これら都内百貨店の宣伝や商法からヒントを得て、札幌本店内で朝昼夕の3回、有線放送のマイクを使った音楽放送を行い、新館開店時には終日、一階と二階の正面中央階段脇でピアノ・トリオによる生演奏を行わせている。メンバーの一人であるピアニストの山本明は、後の

1931年（昭和6年）に団員50名程で結成された北日本交響楽団の指揮者を任されている。

1928年（昭和3年）に丸井今井本店が土足入場へ改めた頃からは、ヴァイオリン、チェロ、クラリネット、サキソフォーンにトロンボーンを加えたジャズ・バンドを編成し、大勢の買い物客を楽しませた。このバンドが前述した「丸井ジャズ・バンド」で、1928年（昭和3年）の札幌中央放送局開局の頃に昼の番組でポピュラー音楽を演奏するなど、外部でも活躍していた。「当時、百貨店に専属のプロ楽団が設けられたことは、札幌として全く稀有のことであり、従来の楽隊から楽団への向上でもあり、大衆に対する洋楽普及と併せて大きな宣伝であった^{xxvii}」という。小品の序曲、ワルツ、タンゴなどを演奏していたヴァイオリンメンバーの清水繁雄は、丸井今井の「ピアノ・トリオ」、「ジャズ・バンド」と、前述した中島オーケストラや映画館での演奏の仕事を掛け持ちしていた。札幌出身ではあるがメンバーに入る前は東京の映画館の楽士として働いていた清水は、時折ラジオにソロ出演もし、丸井今井の女性店員達にもヴァイオリン指導を行っていたという。1932年（昭和7年）にバンドは解散したが、メンバーの山田栄一はその後、東京へ出てNHKの音楽編曲者として活躍している。

函館にも目を転ざると、特に1942年（昭和17年）頃には企業や官公庁が編成した吹奏楽団が盛んで、丸井今井函館支店を含め、6楽団が活動していたという^{xxviii}。丸井今井とは競合関係であった百貨店の棒二森屋では1937年（昭和12年）に15名からなるプラスバンドを編成したものの、翌年に「国家総動員法」が制定されるなど戦争への機運が高まっている中では軍行事での活動も多くなり、従業員も隊列を組んで楽隊の後ろを行進していた時期もあったという^{xxix}。やがて戦地へ送られる社員が多くなり、1943年（昭和18年）には解散

している。

丸井今井に話を戻すと、戦後にレクリエーション活動として結成されたプラスバンドは、社会人音楽イベントの「日本産業音楽祭 北海道大会」で上位受賞チームの常連となっていた^{xxx}。前述の音楽隊、ピアノ・トリオやジャズ・バンドといった音楽活動の息吹はしっかりと受け継がれていくこととなる。

②今井記念館やその他の文化活動

百貨店が所有するホールとしては、日本橋の白木屋が1911年（明治44年）に舞台付きで二百数十名の椅子席を備えた余興場を設けており、松坂屋上野店では1917年（大正6年）に新本館を竣工した際に大ホールを設けている。日本橋の三越本店に現存する「三越劇場」は1927年（昭和2年）の改修工事の際に作られ、当時は七百席近い客席を備えた大規模劇場で、当時は「三越ホール」の名称で邦楽や舞踊のおさらい会などに利用されていた。

北海道では、文化活動に力を注いでいた丸井今井が1926年（大正15年）に「今井記念館」を開館している。前年に逝去した店祖今井藤七らの功績を後世に伝える目的で銅像の建立とともに作られた記念館ではあるが、二階建ての鉄筋コンクリート造りで、三百名程度収容可能な講堂が二階部分に設けられていた^{xxxi}。札幌ではそれまで小・中規模の演奏会の多くは主に映画館で行われていたが、今井記念館は規模、音響ともに室内楽の演奏会場として適しており、前述した伊福部らの企画演奏会などといった中規模の音楽会や舞台公演、また展覽会場、市民講座の会場として頻繁に使用されていた。しかし戦時の1943年（昭和18年）には、前庭に飾られていた今井藤七の銅像が金属類回収令により供出され、戦後には建物は進駐軍のダンスホール及びナイトクラブとして使われることとなる。当時、駐留軍により三越札幌店は全

館接収されていたが、丸井今井はエクスポートバザー（外国人専用国産品売り場）が開設され、今井記念館では道内に疎開していた東京、大阪のバンドマンたちが集まり、進駐軍慰安のための演奏活動を行っていた。進駐軍の完全撤退によって丸井今井が全館を取り戻したのは1949年（昭和24年）であった。なお、今井記念館は1970年に解体されたが、三兄弟の胸像などは現在、丸井今井保存会によって新潟県三条市の丸井今井邸に資料展示とともに設置されている。

丸井今井は常に新しい文化商品に着目しており、明治30年前後に蓄音機が日本に輸入された際にはいち早く取り入れて店頭に並べ、1907年（明治40年）には当時の北海道には数少なかったピアノを取り寄せ、店頭でオルガンなどの和洋楽器を充実させていた^{xxxii}。1916年（大正5年）に百貨店として開店した際の宣伝に配布された「今井呉服店案内」の楽器陳列部にはオルガン、ヴァイオリン、手風琴、ハーモニカ、尺八、明笛、横笛、琴附属品などと記載がある^{xxxiii}。

他の文化活動についても触れると、特に美術展は頻繁に開催しており、札幌に三越百貨店が進出した頃からは、互いに多くの展覧会を企画するようになった。百貨店（デパート）が喫茶店（カフェ）に代わって個展の発表の場として提供するなど、道民の文化レベル向上に貢献している。

また、丸井今井は本店・支店ともに屋上に庭園、茶室、音楽堂を設けるなど文化的施設の充実が図られていたことは前述したが、1937年（昭和12年）に本店増改築が行われた際には六階に椅子席四百名収容の大ホールが作られている。その大緻帳は目を奪うほど豪華絢爛なものであったというが、そこでは音楽に限らず、多くのイベントが開催されていたという。1948年（昭和23年）にはホールを改造し、北海道新聞社と提携した「ニュース劇場」を開設している。当初の入場料は無税上限の

2円99銭で、内容は、ニュース映画を4、5本、字幕なしのディズニーなどの短編映画と長編劇映画を1本、週交替りで上映していた。テレビが普及していない娯楽の少ない時代に、全国百貨店に先駆けて作られたこの施設は常に満員で、翌1949年（昭和24年）3月、NHK全国ラジオ放送で「珍しい教育番組」として紹介されている。1953年（昭和28年）に北海道でNHKテレビ放送が開始した頃、札幌本店増築とともに「ニュース劇場」は屋上へ移動したが、札幌周辺の人々に親しまれたこの施設は1968年（昭和43年）にはその役割を終え、閉館する。

その後、3代目社長の今井道雄も1971年（昭和46年）の創業百年記念の際に、札幌市の児童の健全な成長を願い、各小学校に248台のエレクトーン寄贈を行うなど、文化啓蒙活動を精力的に行っている。丸井今井は、創立時の明治から大正、昭和と生活環境や文化水準が劇的に変わっていった北海道において、常に時世を先取りし、発信地としての役割を担った百貨店であった。

おわりに

明治初頭まで未開の地であった北海道は、歴史の浅い地方であるが故に、開拓者精神を持った人々によって拓かれて急激に進歩を遂げ、やがて精神面における質の向上を目指すべく文化的な面に力を注ぐこととなった。現在、北海道からは、世界的に認められる存在となった札幌交響楽団をはじめとする多くの音楽家や芸術家、文化人が輩出されている。そういった文化的環境を持つ地域へと発展し得たのには、北海道の黎明期に、従業員による文化の種まきとも言える音楽隊の活動を行っていた「丸井今井」の功績も少なからずあったと言える。今後も北海道という特色ある土地から生まれる芸術文化のさらなる発展を期待したい。

- i 北海道に昔から生活していた先住民族であるアイヌは独自の文化を築いていたが、住む場所も追いやられ、大きな迫害を受けていた事実は周知の通りである。
- ii 日本では手遊び歌として親しまれているアメリカ民謡《アルプス一万尺》の原曲である。
- iii 「ジェームス・ダン物語 第1回」『ピティナ調査・研究』、一般社団法人 全日本ピアノ指導者協会 HP 参照。https://research.piano.or.jp/series/baton/2020/06/jamesdun_1.html
- iv フェントンは当時、国歌がなかった日本のために「君が代」を作曲したが、和声や曲想が当時の日本人には難解であった。1888年(明治21年)に改訂された現在の「君が代」は、一等伶人の林廣守作曲、宮内庁楽部伶人の奥好義による旋律、後述のエッケルトによって和声付けされ、完成した。
- v レーヤは後に再来日し、1900年(明治33年)から5年間、東京音楽学校の指導者として当時の日本の洋楽発展に貢献している。
- vi 豊平館とは、1880年(明治13年)に開拓使によって札幌市大通付近に建てられた道内最上級西洋ホテルであったが、現在は中島公園に移転し、重要文化財となっている。
- vii 1895年(明治28年)の音楽雑誌によると「北海道の少年音楽隊」、「北海道浦河軍楽隊」、札幌農学校と中学校の生徒が一緒になって編成した音楽隊などの少年音楽隊などいくつか存在していたという。このあたりの資料についても前川公美夫氏の『北海道音楽史』が膨大な資料のもとに編纂され、当時の北海道の音楽事情について詳述されている。
- viii 博覧会の報告書によると、ここで演奏するにあたり、楽員の楽器と制服は新調すること、和洋200以上の楽譜を準備すること、などの条件が出されており、楽長の斎藤は上京して求められただけの楽譜を入手し、練習したという。『さっぽろ文庫57 札幌と音楽』、pp.98-99。
- ix 『北海道音楽史』、p.125。
- x この軍楽隊は1944年には後に作曲家となった団伊玖磨や芥川也寸志ら東京音楽学校の学生も入隊していた。「徴兵されてしまうならば軍楽隊を志願したらどうか」と軍楽隊長から東京音楽学校長に打診され、実現されたという。結成当時から音楽についても厳しいスパルタ指導であったという。『日本の音楽家を知るシリーズ芥川也寸志』、pp.44-45。
- xi 工藤富次郎「本道の音楽について」参照、『北海道文化史考』所収、pp.302-308。
- xii プログラム最終曲がラロの《スペイン交響曲》であったが、招聘元からクラシック音楽の中ではポピュラーな曲であるサラサーテの《ツイゴイネルワイゼン》にしたらどうかと提案があり、急遽変更されたという。『KAWADE 夢ムック文藝別冊 伊福部昭』、p.48。
- xiii 『さっぽろ文庫57 札幌と音楽』、pp.98-99。
- xiv 『北海道音楽史』、p.291。
- xv 同前、p.241。
- xvi 『KAWADE 夢ムック文藝別冊 伊福部昭』p.49。
- xvii 同前、p.52。
- xviii 『札幌の歴史』第27号、「新札幌市史」機関紙、p.58。
- xix 三兄弟の名前からつけられ、明治32年に開店した店舗である。『丸井今井百年のあゆみ』p.139。
- xx 新北海道史にある記述より。勝亀奈美枝「大正・昭和戦前期の札幌における百貨店の展開」『札幌の歴史』第27号所収、p.15。
- xxi 『絵とき 百貨店「文化史」』、p.159。
- xxii 『百貨店の文化史』、p.77-78。
- xxiii 『絵とき 百貨店「文化史」』のp.160に「店員だけの音楽隊を組織していたのは松屋であり、個人でアコーディオンや大太鼓、小太鼓を買い揃え、閉店後に練習をしていたという。ユニホームはバッキンガム宮殿の衛兵に模して、赤いネールで作ったり、真っ白の水兵服だったり。日露戦争の戦勝祝賀行列に参加したという」との記述がある。
- xxiv 「呉服屋と洋物店、印半纏の音楽隊 清水雄平談」より。『新聞と人名録にみる明治の札幌』の「第1編 新聞(聴いて置き度い昔噺)」に所収。
- xxv 『北海道音楽史』、p.90。前川によると、小樽音楽界の長老酒井正忠の言による、とある。
- xxvi 『丸井今井百年のあゆみ』、p.363。
- xxvii 同前、p.462。
- xxviii 函館地区吹奏楽連盟HP、「沿革」より。
- xxix 海軍の楽隊のような華やかな衣装を着て演奏する写真が残っている。『棒二森屋物語』、p.43。
- xxx 朝日新聞社主催で1956年(昭和31年)から2005年まで関東大会、関西大会などと分かれて開催されていた社会人のための音楽イベント。吹奏楽だけでなく、軽音楽、弦楽合奏、合唱、邦楽などの部門があった。
- xxxi 「写真を見るとベンチが左右に三列、前後に十二、三列あり、開館披露式では一つのベンチに六人ほどが腰かけている」という。『北海道音楽史』、p.298。
- xxxii 『丸井今井百年のあゆみ』、p.469。
- xxxiii 同前、p.484。

主な参考文献

- ・谷内正往、加藤 諭『日本の百貨店史 地方、女子店員、高齢化』、日本経済評論社、2018年
- ・西谷文孝『百貨店の時代』、産経新聞出版、2007年
- ・山本武利、西沢 保編『百貨店の文化史』世界思想社、1999年
- ・和田博文『三越 誕生！帝国のデパートと近代化の夢』、筑摩書房、2020年
- ・宮野力哉『絵とき 百貨店「文化史」』、日本経済新聞社、2002年
- ・初田 亨『百貨店の誕生—都市文化の近代』、ちくま学芸文庫、1999年
- ・飛田健彦『百貨店ものがたり—先達の教えにみる商いの心』、国書刊行会、1999年
- ・札幌市教育委員会文化資料室編『さっぽろ文庫 57 札幌と音楽』、北海道新聞社、1991年
- ・田中一編『今井 沿革と事業の全貌』、日刊土木建築資料新聞社、1940年
- ・丸井今井120年史編纂委員会編『丸井今井創業百二十年史 一世紀と二十歳のあゆみ』、株式会社丸井今井、1992年
- ・石田篤郎編『丸井今井百年のあゆみ』、丸井今井、1973年
- ・札幌市教育委員会文化資料室編『新聞と人名録にみる明治の札幌』、札幌市、1985年
- ・前川公美夫『北海道音楽史』、株式会社大空社、1995年
- ・富貴堂『七十年のあゆみ—富貴堂小史』、富貴堂、1968年
- ・札幌中央放送局編『北海道文化史考』、日本放送協会札幌中央放送局、1942年
- ・札幌市教育委員会編『札幌市史』第1巻～第4巻、北海道新聞社、1989-1997年
- ・新札幌市史機関紙『札幌の歴史』第27号、札幌市教育委員会文化資料室、1994年
- ・小池田清六、大西剛『棒二森屋物語—幕末から平成まで百五十年の歴史』、新函館ライブラリ、2019年
- ・函館市史編さん室編『函館市史デジタル版』、函館市、1974-2007年
- ・新・3人の会『日本の音楽家を知るシリーズ芥川也寸志』、ヤマハミュージックエンターテイメントホールディングス、2018年
- ・片山杜秀編『KAWADE 夢ムック文藝別冊 伊福部昭』、株式会社河出書房新社、2014年

A consideration on the establishment of European music — Efforts of a local department store —

Hiromi AKAI

【abstract】

Hokkaido, which was called “Ezo” and had fallen behind in European music culture, is currently recognized to have a high standard culture on European music, due to various factors.

European music culture in Hokkaido was promoted and established with the spread of Christianity singing hymns and music education at schools. However, we cannot discuss the promotion and establishment without thinking existence of the "music corps" that grew up among the common people.

In this paper, we will consider the efforts of "Marui-Imai", a local department store that had been conducting music activities organized by employees since the Meiji era.

【key words】

Hokkaido, Popularization of European music, Music corps, Department store, Marui-Imai